

MYOKOに 寄せられた声

「ここ来ると子どもたちが変わる」という意見を、たくさんの利用者からいただきます。皆様からいただいた声を糧に、私たちは今後も青少年教育を先導する国立の施設でありたいと考えます。

国立の施設としての存在意義が問われている今こそ、私たちは「自然の家には、子どもたちを変える力がある」ということをたくさんの人に知ってもらいたいです。



MYOKO という場所

NPO法人緑とくらしの学校
元妙高自然の家職員 蟹江 真耶

自宅からMYOKOに行く道が好きです。町並みを抜けると次第に道路沿いは田んぼから木々が茂るようになり、真正面に見える妙高山へ向けて車を走らせる清々しさ。そして取り付け道路に入り様々な表情を見せる落葉松の林を抜ける時、「この先に何があるのだろう」と胸が高鳴るのです。

私はこの道を何回も通り、そのたびにたくさんの出会いと新しい気づきがありました。

それまで当たり前身に回りにあった自然を、五感を使って体感すること、新しいことに挑戦する勇氣、お互いに尊重し意見交換できる信頼関係、やり遂げた後の爽やかな笑顔、ゴールすることではなくそこに向かうまでの道りを大切にしたいと思う気持ち。これらはMYOKOにかかわり得られた私だけの財産です。初めて体験することも多く不安な時もありましたが、その時には美しい自然や周囲の方たちが温かく導いてくれました。一つ一つ実感できた時にそれまで知らなかった世界が広がり、その度に心の扉が開いたのだらうと思います。

ここはかけがえのない場所です。私にとってそうであったように、妙高青少年自然の家を訪れる方たちが、ここでの経験を自信に変えられるような場所であってほしいと思います。



あっという間に過ぎた MYOKOでの体験

南魚沼市立五十沢小学校
教諭(5年担任) 太田 裕樹

あっという間に過ぎた4泊5日の中で、どの情景にも目を輝かせている子どもたちの姿があり、その中で印象強く思い出されることが3つある。

一つ目は、トイレのスリッパ。乱雑になった初日のスリッパと当たり前のように並ぶようになったスリッパ。初日、校長先生が教えてくれた「履物がそろえば心が揃う」「出船、入り船」の話を実行し続け、「思いやりリレー」においてさらにその思いは強化された。

二つ目は、涙いっぱいのお別れ会。我が子のように子どもたちを受け入れてくれた杉野沢の皆様と、民宿での体験が最終日に作った「未来の自分宛はがき」に書かれた家族や家庭の仕事を思う素直な言葉につながった。

三つ目は、集団生活の中で友達や先生に自分の本音をはっきりと伝えることが出来るようになったこと。

だれもが不安を胸にスタートしたが、この体験を通してその不安は大きな自信となった。この自信を胸に仲間と成長していくことを期待している。また、妙高自然の家の先生の方々、保護者の方々に心より感謝したい。



通称、妙高合宿！

上越教育大学
副学長 加藤 泰樹

【主な職歴】

昭和62年4月	東京家政学院短期大学講師
平成2年9月	上越教育大学学校教育学部講師
平成4年9月	上越教育大学学校教育学部助教授
平成13年8月	上越教育大学学校教育学部教授
平成15年4月	上越教育大学学校教育学部附属小学校長
平成19年4月	上越教育大学大学院学校教育研究科教授
平成19年4月	上越教育大学学校教育総合研究センター長
平成20年4月	上越教育大学学校教育実践研究センター長
平成21年4月	上越教育大学副学長

教師を目指す上越教育大学の学生諸君は、ここ「妙高自然の家」で思い出に残る研修合宿を行います。学部3年生たちはよいよ最終学年を迎えるにあたり、これまでの様々な学習活動や教育実習体験の成果を持ち寄り、仲間たちと共に意見を交わし、それぞれの志を新たに確認しあったり、進路について先輩たちから貴重なアドバイスを頂いたりする大切なひとときを過ごします。日常の学園生活から遠く離れ、この自然豊かな妙高山麓という非日常の中で、彼らは、誰からも邪魔されることなく、自然のゆったりとしたリズムの中でじっくりと物思いに耽ることが出来ます。あるものは満天の星空の下で遙か遠くを眺めたり、またあるものは朝靄の中でわけもなく散策したりと、それぞれの独りを楽しむにも絶好の場所です。自然に還ると誰もがなぜかピュアな気持ちになり、物事の出発点に立ち戻るように促されるものです。かくして今年もまたご厄介になります。

合掌



妙高の
すばらしき仲間たち

国立若狭湾青少年自然の家
企画指導専門職 水澤 豊子

「私がやりましょうか?」「コース点検行ってきます」という職員の元気な声が事務室で飛び交う。雪の妙高自然の家の事務室で、最初に「これだ!」と感じたことだ。

「オモイ」を「カタチ」に。カタチにしたい想い、つまり、子どもたちに自然体験をさせたいという強い想いを一人一人の職員から感じる。

想いをもって真摯に取り組む姿勢、仲間が心を開いてみんなで協力する姿勢、これらは凜とした冬の妙高の山のようなすがすがしい。

勿論、完璧ではないし、同じ組織の仲間としてちょっと褒めすぎかもしれない。しかし、同じ組織の仲間だからこそ、忘れがちな心得を繁忙期でも実践している仲間を誇りと思うし、それを可能にしているシステムを手本にしたいと思うのだ。

私は、実地研修で1ヶ月間、雪の妙高自然の家に来た。よい土産を山ほど持ち帰ることができるだろう。



圧倒的な
MYOKOの
自然

教育実習生 筑波大学
近藤 健太 / 上原 賢一郎

社会教育実習生として妙高に一週間お世話になりました。様々な業務体験を通して、仕事への態度から国立の青少年教育施設の意義まで、非常に多くのことを学ぶことができました。実習中、特に印象に残った活動は「スノーシューハイク」です。スノーシューを履き、坪岳山頂を目指して歩いた雪道では動物の痕跡を見つけ興奮し、山頂では眼前に広がる山並みに圧倒されました。言葉にできない数多くの魅力を、冬の妙高の自然に感じることができました。

また、今回は利用者として訪れるだけでは分からない自然の家の仕事の大変さも知りました。自然の家のすばらしさを感じるとともに、それが職員の方々の献身的な取り組みによって支えられているのだということも学びました。本当にありがとうございました。